

Mary Barton

—— そのモデルと種本 ——

閑 田 朋 子

Elizabeth Gaskell 作 *Mary Barton* は、1848 年に出版された。この年には、フランスの 2 月革命に続き、ドイツでは 3 月革命が、同月 13 日、オーストリアでは首都 Vienna に暴動が、プロシアでは 18 日に首都 Berlin に革命が起きている。イギリス国内でも、3 月に London や Manchester で暴動が起きている。また、労働者の “hunger and anger” から生まれたと言われる Chartism は最後の高まりを見せ、4 月 10 日には London の Kennington Common で集会が開かれている。社会不安が昂じる中で、労働組合や Chartism を扱う *Mary Barton* は時の作品として注目を浴びた。

この *Mary Barton* の粗筋のモデルについては、三つの説がある。第一に 1831 年の Thomas Ashton の殺人事件であり、この説については、Gaskell 自身が否定する。¹ 第二に Patrick Brantlinger が主張する 1837 年の Glasgow の殺人事件である。後に Gaskell は、執筆中に一二の Glasgow の事件が念頭にあったことを述べている。ただし、具体的な事件名には言及していない。第三に Michael Wheeler の説である Elizabeth Stone の作品 *William Langshawe* である。主に小説の労働組合員による暗殺場面の典拠をあげる前二説に対して、第三説はヒロインをめぐる三角関係など、より広い意味での物語のモデルを示唆している。ここでは以上三つの説を検討するとともに、第四の可能性を挙げ、*Mary Barton* が書かれる以前に社会に存在した原 *Mary Barton* を追いたい。

まず、Thomas Ashton の殺人から始めよう。労使間の対立が緊迫し、ストライキが相次ぐ中、1831 年 1 月 3 日に、Manchester の近郊 Werneth で当時 23 歳だった工場主の息子 Thomas が殺される。*Mary Barton* が出版された翌年 1849 年 2 月、*British Quarterly Review* の批評家が、この事件と作中の Harry Carson の暗殺との類似を指摘している。² 更には、Thomas の甥 Arthur B. Potter によ

ると、Thomasの妹のMaryは、同1849年に*Mary Barton*を読み、作中の暗殺が兄の事件をモデルにしていると思い至って気絶し、彼女の夫Thomas Bayley Potterおよびその兄John PotterがGaskellに抗議している。³ 1993年には、Jenny Uglowが「部分的に」ではあれ、この殺人事件が*Mary Barton*のモデルであると述べている。⁴

この殺人事件と*Mary Barton*におけるHarry Carsonの殺人との主な類似点を眺めるとき、Ashtonの殺人現場で銃口の詰め物になっていたらしい紙片が発見され、それが犯人断定の手がかりと目された点は特筆に価する。作中で、Estherが銃口に詰められていた紙片を殺人現場で発見し、この紙片からMaryが暗殺者は父親であると悟るくんだり酷似しているからだ。⁵ 当時の新聞を調べると、Ashtonの殺人現場で発見された紙片については、北の工業地帯では*Manchester Guardian*を始めとする多くの新聞に報道されている。⁶ *Mary Barton*執筆中にそれと意識していたかどうかは別問題であるが、Knutsfordに住んでいたGaskellが、何らかの形でこれを見聞していたと考えてまず間違いない。⁷

しかし、このような細部ではなく、Ashton殺害が作中のCarsonの殺人そのもののモデルであるとする従来の説に、私は疑問を感じる。その3年後(1834年)までAshton殺害の犯人は特定されなかった。それにもかかわらず、この殺人は、スト中の労働者によるHydeの工場主全体への脅迫、もしくはみせしめであるという噂が流れる。⁸ 殺人事件のあったHydeでは労使関係は良好であり、この界限のストにThomasの父親の工場はもとよりHyde全体の紡績工が参加していなかったからだ。これは、足並みが揃って始めて意味をなすストには致命傷となり得た。*Manchester Guardian*はこの憶測を支持する。これに対して*Voice of the People*は、スト中の労働者に対する誹謗だとする抗議の手紙を載せる。だが、*Manchester Guardian*は、意見を変えない。それどころか、この殺人直後に、ストがらみの殺人未遂が相次いだことを示唆している。⁹ *British Quarterly Review*もまた、殺人事件直後に少なくとも5件は暗殺未遂があったとしている。¹⁰ ただし、両者とも暗殺計画の証拠はあげていない。

更には、Frederick Engelsも、14年後の1845年に当時を振り返り、手がかりがなかったと言いながらも、労働者の復讐であることは疑いがないと断言する。¹¹ 三文誌ならばともかく*Manchester Guardian*のような定評のある新聞や労

働者に同情的である Engels が、証拠が無いにもかかわらず、このように断言していることは、注目に値する。世間一般が「労働組合」から「殺人」を連想していたことが分かる。労働組合による殺人という物語がすでにここまで定着していた社会において、Thomas の殺人だけが *Mary Barton* の Carson 殺害のモデルであると断言することは早計ではないだろうか。

第二説の「グラスゴー殺人事件」は、Ashton 殺人の6年後（1837年）に起こる。殺された John Smith はスト破りであり、裁判にかけられた労働組合員は5人、うち首謀者は Thomas Hunter だと考えられた。判決は、殺人については「証拠不十分」、ただし、スト破りを脅迫したかどで7年の流刑を言い渡されている。Gaskell は、*Mary Barton* の創作の際に念頭にあったのは、先の Ashton の殺人ではなく、“one or two similar cases at Glasgow at the time of a strike” だと述べている。¹² これを、1929年には Whitfield が、¹³ 1969年には Blantlinger が、この Smith の殺害だと推測している。¹⁴ Smith の殺人事件は一地方の裁判に留まらず、1838年には英国議会の特別調査委員会が労働組合について過去25年に遡って取り調べるところとなり、その議事録は世間の耳目を集めているから、¹⁵ 妥当な推測と言える。

ただし、この説の細部については、疑問が残る。*Mary Barton* には、Carson の暗殺者を決定する場面で、組合のためには殺人も辞さないとする「誓い」についての言及がある。¹⁶ Brantlinger は、この「誓い」の場面の下敷きとして John Smith の殺人事件をあげるが、¹⁷ これについては私は懐疑的である。事件の取調べの記録を細かく調べても、「誓い」についての決定的な証言がないからだ。Lanarkshire のシェリフである Archibald Alison は、組合に忠誠を誓う習慣が、ある程度は残っていることを強調しつつも、1825年以来、廃れてきていると証言している。¹⁸ 事件の翌年（1838年）に Alison は匿名で、*Blackwood's Edinburgh Magazine* に寄稿し、労働組合が暗殺や暴力に対して報酬を払ったと述べるが、忠誠の誓いには言及していない。¹⁹ Andrew Gamill は、裁判に際して取り調べた約300人の労働者のうち、1825年以降に誓いを行った例は二件だけであったと証言している。²⁰ 何よりも違法の誓いを行った嫌疑に対しては、有罪判決は出されていない。

さて、Hunter らの無実を信じる William Lovett は1876年に当時を振り返り、

共謀罪、放火、殺人などの嫌疑は「証拠不十分」であったにもかかわらず、繰り返される報道のうちに、世論が、有罪は公然の事実であり、これらの嫌疑が労働組合全般の真実であるかのような論調に変化していったことに言及している。²¹ 先の Smith 殺害の場合と同じく、証拠の有無よりも、「殺人も辞さない労働組合」という社会的な物語が先行していたのではないか。年代順に例を挙げれば、1823年の Glasgow では、紡績工が労働組合に入会する際に、組合のためには殺人も辞さない旨の宣誓がなされたという造幣局長の Wallace の証言が、1825年の議会の議事録に残っている。²² 1834年3月には、George Lovelessをはじめとする Dorsetshire の農場労働者6人に対して、違法の宣誓を行ったというそれだけの罪状で、7年の流刑が言い渡される。彼らは“Tolpuddle Martyrs”と呼ばれ同情を集めた。この行き過ぎた判決に対して、同年4月21日に Robert Owen を先頭に London の労働者が Copenhagen Fields まで抗議のデモ行進を行う。²³ 同年(1834年)に Edward Carleton Tufnell が匿名で出版したパンフレットには、*Hansard* では省かれた部分も含めて Wallace が証言したの組合の誓いが引用されている。²⁴ その後も、この Wallace が証言した組合の誓いは、1838年に *Annual Register* に引用されている。²⁵ 1841年に出版された Dickens 作 *Barnaby Rudge* で Mark Gilbert が“vengeance on their Tyrant Masters”を目的とする 'Prentice Knights に入会する場面、²⁶ 1842年出版の *William Langshawe* の James Foreshawe の、²⁷ Disraeli 作 *Sybil* (1845) では Dandy Mick の組合加入の儀式は、²⁸ 直接間接の差はあろうが、明らかに Wallace の証言を下敷きにしている。「組合加入の儀式と誓い」についての物語がここまで定着した社会において、*Mary Barton* の「組合の誓い」が John Smith の殺人事件だけをモデルとしたとは考えがたい。

Mary Barton において Smith の殺人事件がモデルとなっているのは、従来指摘されているこの誓いの部分ではなく、別の箇所ではないか。作中、Carson の暗殺者を決めるために、組合員たちがくじ引きをする場面がある。紙を裂きそのうちの一つに印をつけて帽子の中に入れ、暗くした部屋でそのくじをひく。各自、くじを確かめて、結果については一言も言わずに解散する。²⁹ 他方、実際の Smith の殺害について、真偽のほどの分からない情報が流れていた。Glasgow の労働組合にはわずかに3人からなる“Secret Select Committee”があり、この委員

会がどの組合員に暗殺、暴行、放火など裏の仕事を割り振るかを決めていたという情報である。この三人が紙片にこれと思う組合員の名前を記入し帽子に入れる。暗い部屋で、三人のうちの一人がくじを引き、結果はもとより一言も言葉を交わさずに解散したというものである。おそらくこの部分を Gaskell はモデルに使ったものと私は推測する。ただし Gaskell が何を参照したのかは不明である。 *Examiner* は、典拠として *Glasgow Courier* を挙げている。³⁰ 他の新聞やパンフレットにも同様の記事が載っていた可能性が高い。³¹

第三説は、Elizabeth Stone の小説 *William Langshawe, the Cotton Lord* (1842) が種本であるとする Wheeler の説である。Elizabeth Stone は、当時それなりに名前の売れた社会派の作家であった。³² *William Langshawe* については、*Examiner* や *Athenæum* に書評が載っている。³³ 当時、匿名で出版された *Mary Barton* は、Stone の作品だという噂が立った。³⁴ 両作品には、かなりの共通点が見られるからだ。どちらも Manchester を舞台とし、恋愛（三角関係）と社会問題を絡ませた筋立てであり、労使の対立の末に工場主の息子が殺される。どちらの作品も、労働者階級の女性の登場人物、すなわち *Mary Barton* と Nancy Halliwell が、工場主の息子に誘惑される。どちらの女性にも、労働者階級の誠実な求婚者がいる。両作品とも、労働組合のためには殺人も辞さないという組合の誓いに言及している。

このように類似点は多いが、この説には多くの反論がある。1971 年に Anne Smith は、*William Langshawe* と *Mary Barton* の類似点を認めながらも、前者が後者に影響を及ぼしたと断定することはできないと結論している。³⁵ Sheila M. Smith は、Gaskell はこの作品を読んでいなかったと主張する。³⁶ Gaskell は、手紙の中でこの作品を“some book called the ‘Cotton Lord’”と呼び、作者の旧姓 Wheeler と結婚後の姓 Stone を取り違え、³⁷ 題名も作者名も間違えている。

これに対して Wheeler は Stone の知名度を考慮し、Gaskell はとぼけてみせたのだと主張する。私もこの意見に賛成である。根拠は登場人物の名前である。まず、組合員に暗殺される工場主の息子の名前は、両作品とも Henry である。どちらの作品にも労働者階級の美しい女性をめぐる三角関係が描かれ、男性のうちの一人は誠実な労働者である。両作品ともその労働者の名前は Jem である。この Henry と Jem の名前の重複については、Fryckstedt が指摘している。³⁸ 更に

はこの三角関係の二人の男性及び作品表題名となっている人物の名字は、*William Langshawe* では、Foreshawe・Balshaw・Langshawe と韻を踏む。*Mary Barton* でも、Wilson・Carson・Barton とやはり韻を踏む。これだけでは、単なる類似として片付けられるかもしれないが、なぞを解く鍵は第四の可能性にある。

私が *Mary Barton* の直接の種本として挙げるのは、1839年に *Fraser's Magazine* に匿名で発表された短編小説“The Luddite's Sister”である。³⁹ “The Luddite's Sister”の美貌のヒロイン Mary は、唯一の肉親である弟 Richard と暮らしている。姉の心配をよそに Richard は労働運動にのめりこんでいく。この Mary には、中産階級の求婚者と労働者階級の求婚者がいる。激化する労働運動の中で、前者が撃たれて殺される。Mary は、顔をマスクで隠した犯人と思われる人物を目撃するが、それが弟の Richard だと知り驚愕する。*Mary Barton* との類似は言を俟たない。両作品とも、労働者階級のヒロインをめぐる三角関係が描かれている。そして、両作品とも、二人の求婚者のうちの一人は労働者階級、一人は中産階級の出身である。そして、両作品ともこの二つの階級間の摩擦の中で、中産階級の求婚者が撃たれて殺される。両作品ともヒロインは、生活を分かち唯一とも言える肉親が労働運動にのめりこむことを心配する。両作品ともヒロインはこの肉親が犯人ではないかと苦しむ。筋の類似だけではない。この作品のヒロインの名前は Mary Wilson である。*Mary Barton* のヒロインの名前もまた同じ Mary である。*Mary Barton* が結ばれる恋人は Jem Wilson である。結婚後の Mary の名前は、Mary Wilson、つまり“The Luddite's Sister”のヒロインと同じ名前になる。これだけの名前に対する作者のこだわりが見られる以上は、*William Langshawe* と *Mary Barton* の登場人物の名前の類似もまた、単なる偶然としては片付けられない。

ただし、*William Langshawe* にしても“The Luddite's Sister”にしても *Mary Barton* との類似は表面的なものにすぎない。⁴⁰ John Barton を通して労働者に理解と共感を求める *Mary Barton* に対して、この二作品には労働運動に加わる労働者に対する同情心は見られない。*William Langshawe* は、南の人間に対して工場主への理解を求める作品である。“The Luddite's Sister”は、キリスト教以外の教育が、労働者には害になると主張するプロパガンダ小説である。Gaskell は両作品に対するアンチテーゼとして *Mary Barton* を書き、その謎解きのヒントを登場

人物の名前に託したのだ。だが、読者はそれに気がつかない。それどころか、皮肉にも *Mary Barton* の作者は *William Langshawe* の作者である Stone だという噂が立つ。そこで、Gaskell は内心苦笑のうちにとぼけて見せたのだ。

結論を述べよう。まず、Gaskell は “The Luddite’s Sister” と *William Langshawe* に対するアンチテーゼとして *Mary Barton* の骨組みを作った。その上で、銃口の詰め物になっていた紙片から父 John Barton が犯人であることを Mary が知る場面は Thomas Ashton の殺人についての報道を、くじ引きで Harry Carson の暗殺者を選ぶ場面は John Smith の殺人についての報道もしくは世間の流言を参考にした。労働組合による暗殺や、組合のためであれば暗殺も行うと誓う入会の儀式については、これらの二件の殺人事件に限らず、他の様々な類似の事件からすでに中産階級に定着していた社会的な物語を下敷きとした。*Mary Barton* は、既存の小説 2 編と既存の労働紛争のイメージを骨組みとし、実際の殺人事件からの細部をモデルとして、創作されたのだ。

注

* (本稿は、2001 年 10 月 7 日に日本ギヤスケル協会第 13 回大会で行った発表に基づいている。当日、貴重なご助言を下された皆様、また、同発表概要を『英語青年』147 巻 12 号に掲載することをご快諾下さった協会に深謝したい。)

1. Elizabeth Gaskell, *The Letters of Mrs. Gaskell*, J. A. V. Chapple and Arthur Pollard eds, Manchester: Manchester UP, 1996, no.130.
2. “Mary Barton. A Tale of Manchester Life,” *British Quarterly Review* 9 (1849) : 130.
3. *Letters*, no 130. Michael Wheeler, “Two Tales of Manchester Life,” *Gaskell Society Journal* 3 (1989): 19. Jenny Uglow, *Elizabeth Gaskell: A Habit of Stories*, London: Faber and Faber, 1993, 216.
4. Uglow, 192.
5. “Mary Barton,” *British Quarterly Review*, 130. Wheeler, 17-19.
6. “Murder of Mr. Thomas Ashton,” *Manchester Guardian*, January 8, 1831.
7. James Wheeler は、“A strong sensation was ... excited by the murder” と述べている (*Manchester: Its Political, Social and Commercial History, Ancient and Modern*, London: Whittaker, Manchester: Love and Barton, 1836, 131)。
8. “Murder,” *Manchester Guardian*, January 8, 1831.

9. "The Ashton Spinners," *Manchester Guardian* January 22, 1831.
10. "Mary Barton," *British Quarterly Review*, 131.
11. Frederick Engels, *The Condition of the Working-Class in England: From Personal Observation and Authentic Sources*, trans. Institute of Marxism-Leninism, Moscow: Progress, 1973, 256. Wheeler, 17.
12. *Letters*, no.130.
13. A Stanton Whitfield, *Mrs Gaskell: Her Life and Work*, London: George Routledge, 1929, 118.
14. Patrick Brantlinger, "The Case against Trade Unions in Early Victorian Fiction," *Victorian Studies* 13 (1969): 37-52.
15. Blantlinger は Carlyle の "Glasgow Thuggery" をこの事件と同定している (37)。 Thomas Carlyle, *Chartism*, 1839, 2nd ed, London: Chapman & Hall, 1862, 3, 34, 40, 42.
16. Elizabeth Gaskell, *Mary Barton: A Tale of Manchester Life*, 1848, ed. Macdonald Daly, London: Penguin, 1996, 190; ch.16.
17. Blantlinger, 37-39.
18. *British Parliamentary Paper* 8 (1837-1838), 2096-2098.
19. [Archibald Alison], "Practical Working of Trades' Unions," *Blackwood's Edinburgh Magazine* 43 (1838): 296.
20. *British Parliamentary Paper* 8 (1837-1838), 2729.
21. William Lovett, *Life and Struggles of William Lovett*, London, 1876, Liverpool: MacGibbon & Kee, 1978, 131.
22. *Hansard, Parliamentary Debates*, ns. 13 (1825) col. 1401-1402.
23. Sidney and Beatrice Webb, *The History of Trade Unionism*, new ed, London: Longmans and Green, 1911, 123. Keith Laybourn, *A History of British Trade Unionism c.1770-1990*, Stroud: Alan Sutton, 1992, 29-30.
24. [E. C. Tufnell] *Character, Object and Effects of Trades' Unions: With Some Remarks on the Law Concerning Them*, London: James Ridgway and Sons, 1834, rep. as *Character, Object and Effects of Trades' Unions 1834*, Arno; New York, 1972, 66-75. Wheeler, 16.
25. *Annual Register on a View of the History and Politics of the Year 1838*, 80 (1839): 204-205.
26. Charles Dickens, *Barnaby Rudge: A Tale of the Riots of 'Eighty*, 1841, corr. 1867, 1868, London: Chapman & Hall, 1901, 61; ch.8.
27. [Elizabeth] Stone, *William Langshawe, the Cotton Lord*, London: Richard Bentley, 1842, vol.2, 172-174.

28. Benjamin Disraeli, *Sybil or the Other Nations*, 1845, ed. Thom Braun, intro. R. A. Butler, London: Penguin, 1980, 270-271; bk.4, ch.4.
29. Gaskell, *Mary Barton*, 190; ch.16.
30. "Criminal Combinations of the Trades," *Examiner*, January 21, 1838, 43-44.
31. Gaskell が、*Mary Barton* の創作の際に念頭にあった事件をはっきりと同定せず、"one or two similar cases at Glasgow" と齒切れの悪い表現をしているのは、Smith の事件が、その事件現場である Glasgow の労働組合についての Wallace の過去の証言、もしくはそれに関する言及を思い出させ、両件が記憶の中で重なっていたからではないか。
32. Joseph Kester, *Protest and Reform: The British Social Narrative by Women 1827-1867*, London; Methuen, 1985, 69-90.
33. "William Langshawe, the Cotton Lord," *Examiner*, November 5, 1842, 709. "William Langshawe, the Cotton Lord", *Athenæum*, October 1, 1842, 846.
34. *Letters*, no.30, no.31.
35. Anne Smith, "The Novel of Factory Life, 1832-55," diss. U of Edinburgh, 1971, 170-171.
36. Sheila M. Smith, *The Other Nation: The Poor in English Novel of the 1840s and 1850s*, Oxford: Oxford UP, 1980, 188.
37. *Letters*, no.30, no.31.
38. Monica Correa Fryckstedt, "The Early Industrial Novel: *Mary Barton* and its Predecessors," *Bulletine of the John Rylands University Library of Manchester* 63 (1980) 11-30.
39. "The Luddite's Sister," *Fraser's Magazine* 19 (1839): 243-253.
40. Angus Easson は、*Mary Barton* と *William Langshawe* の類似を "superficial likenesses in its setting and occasional plot detail" としている (*Elizabeth Gaskell*, London: Routledge & Kegan Paul, 1979, 68)。